千里金蘭大学紀要　p.65～72（2007）

境界性パーソナリティ特性尺度開発の試み

Development of Borderline Personality Trait Scale

斎藤　富由起[1]

要　旨

「パーソナリティ障害ほどの重篤さはないが、BPDと類似した認知・行動パターン」は、境界性パーソナリティ特性（Borderline Personality　Trait）と呼ぶことが出来る。BPT研究では信頼性と妥当性を備えた質問紙が作成されていないため、量的研究が遅れていた（加来・斎藤・守谷・末武、2005）。そこで本研究では、境界性パーソナリティ特性尺度の標準化を試みた結果、信頼性と基準関連妥当性の高い5因子38項目の尺度が作成された（α＝.90）。本尺度の因子は弁証法的行動療法における主要4スキルとの適合性が高いため、効果的な介入法と予防法の観点から、主要4スキルを尺度化し両要因の関連性を検討すること、また見捨てられ不安尺度や二分法的思考尺度との関連を求め、本尺度と境界性パーソナリティ障害との関連を検討することが今後の課題として指摘された。

キーワード：境界性パーソナリティ特性 Borderline Personality Trait
弁証法的行動療法 Dialectical Behavior Therapy，尺度 Scale

1．問題提起と目的

境界性パーソナリティ障害(Borderline Personality Disorder：以下BPDと略)とは、非常に不安定な感情、気分、行動、対象関係と自己像を特徴とするDSM-IV-TRにおける第二軸、クラスターBに分類されるパーソナリティ障害の一つである。こうした境界性パーソナリティ障害を巡って、近年、比較的健康な母集団との連続性と非連続性の論争が生じている（井沢ら、1995；井沢、2002）。井沢（2002）によると、症候群的非連続説の立場では、パーソナリティ障害の諸特徴は、外部からパーソナリティに圧力がかかった結果生じる変化とみなされる。他方、DSM-IV－TRに代表される症候学的連続説の立場からは、パーソナリティ障害は特定のパーソナリティ分布の平均値からの量的逸脱と見なされ、それゆえ環境との適合性が低下して、状況に応じた行動バリエーションの採択に機能不全が生じたものと理解される（Cloninger、1987）。換言すると、連続説の立場では、神経症圏のカウンセリングと精神疾患レベルの心理療法が関連性を持つといえる。こうした「パーソナリティ障害ほどの重篤さはないが、BPDと類似した認知・行動パターン」は、境界性パーソナリティ特性（Borderline Personality Trait：以下BPTと略）と呼ぶことができる。

この立場からは、現在、特にわが国の思春期・青年層に蔓延している些細な刺激による自傷行為や軽度な抑うつ傾向、あるいは空虚感の訴えなどを特徴とする一群を境界性パーソナリティ特性と理解し、エビデンスに基づく手法によって認知・行動パターンの変容を試みることが有効と考えられる。しかし、わが国におけるBPD研究は精神力動的な概念である「境界例」（Borderline Case）の事例研究を中心に展開されており、境界性パーソナリティ特性に対する実証的研究はほとんど見られない（加来・斎藤・守谷・末武、2005）。

他方、比較的健康な母集団を対象にした質問紙の作成において、BPD理論と整合性を持つ認知構造が得られれば、その結果は連続説を支持することになり、BPT研究はBPDのアナロジカル研究としての意味を持つ。この立場からの先行研究として、我が国では井沢ら(1995)がミロン版境界性人格特性スケール尺度短縮版を作成し、さらに境界性人格特性を複合PTSDとして理解する仮説を提出している（井沢、2002）。また加倉井（2005）は、弁証

1 Fuyuki SAITO 千里金蘭大学生活科学部児童学科　（受理日：2007年11月8日）

法的行動療法の立場から比較的健康な母集団を対象にDBT版コミニケーション・スキル尺度を作成し、連続説を支持する結果を得ている。さらに海外においてはBOR-A（情緒的不安定さ）、BOR-I(アイデンティティーに関する問題)、 BOR-N(否定的な人間関係)、 BOR-S(自傷行為)の4因子で構成されるPersonality Assessment Inventory（Morey、1991：以下、PAIと略）が開発されている。海外のBPT研究において、十分な信頼性と妥当性を備えているPAIが使用される頻度は非常に高く、わが国でもPAIの下位尺度のいくつかに標準化が試みられている（社浦ら、2006)。

こうした先行研究に基づけば、連続説を前提とした量的アプローチによりBPTを検討する試みは一定の根拠を得ていると考えられる。しかし、わが国で開発されたBPTに関する尺度はいくつかの問題点が指摘されており（加来ら、2005)、現在までBPTの因子構造は明らかにされていない。十分な信頼性と妥当性を備えたBPT尺度の開発は、特に近年注目される思春期、青年期の自傷行動や対人関係におけるBPT的問題行動に対するカウンセリングレベルでの介入や予防に役立つだろう。以上の理由から、本研究の目的は特に青年期に焦点をあてた信頼性と妥当性のある境界性パーソナリティ特性尺度を開発し、その因子構造を検討することである。

2．方法

2－1．項目収集

欧米で最も使用されているPAI（Morey、1991）およびそのスクリーニング尺度であるPAS(Morey、1997)、さらに加倉井（2005）による境界性人格特性尺度の項目を参考に、新たに独自項目が加えられた。加倉井（2005）と同様に、独自項目の収集にあたっては①キャンパスや会社の健康管理センターに通う学生および社会人に携わる臨床経験があり、特にBPDに詳しい専門家からの聞き取り調査②病院での集団療法におけるBPDの臨床経験があり、特にBPDに詳しい専門家からの聞き取り調査③「境界例」,「思春期境界例」として記述されている内容も含め、BPDに関係する文献からBPTを測定しうると考えられる項目収集の3点であった。以上を基準に、BPTに関する専門家5名の協議により、BPTを測定できると考えられる項目加えた計82項目が抽出された。本尺度は「全くあてはまらない」から「非常に良く当てはまる」までの5件法により得点化された。

2－2．妥当性確認のための質問紙

基準関連妥当性を測定するため、井沢ら（1995）によるミロン式臨床多軸目録境界性スケール短縮版（17項目）が同時に実施された。ミロン式臨床多軸目録境界性スケール短縮版（井沢ら、1995）は、BPTを測定するために標準化された尺度である。また、一般的なストレス傾向との関連性を検討するため、Mini27（村上、1994；1999）が用いられた。

BPDは自己愛性人格障害との鑑別が困難であることが指摘されている（Kaplan、1994：Deane、2001）が、この関連性はBPTと自己愛性人格特性にも当てはまると考えられる。そこで、本研究ではBPTと自己愛性人格特性との弁別的妥当性を測定するため、小塩（1998）による自己愛性人格目録短縮版が用いられた。これはDSM-IIIにおける自己愛性人格障害の定義を前提にして作成されたRaskinら（1979）による「自己愛性人格目録に基づく日本版自己愛性人格目録」を小塩（1998）が検査の簡便性を考慮して30項目に短縮した標準化された尺度である。

2－3．調査月日と調査協力者

2006年から2007年にかけて、東京都内の複数の私立大学の講義中に質問紙を配布し、回答を得た。無回答および回答に不備が見られたものを除いた結果、最終的な調査協力者は277名であった（男性70名、女性207名、平均年齢20．3歳、SD＝1.03、有効回答数87.5%)。

3．結果

3－1．因子分析結果

82項目それぞれについて、平均値と標準偏差を算出し、平均値±1 *SD*の値が尺度の上限値および下限値を超えた8項目は、データの分布に天井効果または床効果が生じていると判断し、分析から除外した。次に、因子構造を検討するため、各項目と合計得点の相関係数（I-T 相関）を算出したところ、4項目が削除された。

これらの結果から、70項目について主因子法およびバリマックス回転による因子分析を行った。得られた結果から、因子数は固有値およびスクリープロットにより5因子とし、因子負荷量が0.35に満たなかった32項目を削除し、因子負荷量0.35以上を基準にして、再度同様の因子分析を行った結果、38項目からなる境界性パーソナリティ特性尺度が完成した。以上の結果を Table. 1 に示す。

第一因子は、「後先を考えずに怒ってしまうことがある」（項目48）、「人があまり怒らないようなことでも怒ってしまうことがある」（項目49）、「怒りを感じるとすぐに相手を傷つける発言をしてしまうが、その後ひどく後悔することがよくある」（項目39）などに負荷量が高く、衝動的な怒りを中心とした情動コントロールの困難を意味した内容で構成されていることから「情動制御不全」と名付けられた。

第二因子は「周囲から受け入れてもらいたいと強く願っている」（項目72）、「困った時には、他人からたすけてもらいたいと強く願っている.」（項目70）「大切な人が去っていくくらいなら、どんなことをしてもつなぎ止めたい」（項目47）などに負荷量が高く、真に信頼できる他者からの強い保護欲求を抱きつつも、それを得られない苦痛で構成されていることから「保護欲求不全」と名付けられた。

第三因子は、「友人達の中では、本当の自分ではないと感じる」（項目43）、「私はどこにいても演技をしているように思う」（項目46）、「子どもの時から、表面的な友人はいても、真の友人は少ない」（項目6）に負荷量が高く、長期にわたり適切な対人関係を営むことが出来ない内容で構成されていることから「対人関係制御不全」と名付けられた。

第四因子は、「私にとって、両親とは、どのような存在なのか、よくわからない」（項目36）、「重要な時に親は私を助けてくれた」（項目4：逆転項目）、「ひどくショックを受けると、生きている感覚がなくなるような気がする」（項目64）に負荷量が高く、保護者との関係に強い葛藤を抱く内容で構成されていることから「保護者との関係不全」と名付けられた。

第五因子は「私は前向きで幸せな人間だと思う」（項目42）、「私は社交的である」（項目１）などに負荷量が高く、良好な自己像と対人関係を肯定する内容からなり、全体としての逆転因子の役割を果たしていることから「自己安定性」と名付けられた。

3－2．信頼性の検討

本研究によって作成された境界性パーソナリティ特性尺度の信頼性について、下位尺度ごとに Cronbach の α 係数を算出した。その結果、「情動制御不全」因子で.888、「保護欲求制御不全」因子で.805、「対人関係制御不全」因子で.781、「保護者との関係不全」因子で.724、「自己安定性」因子で。785であった。また、全体としての信頼性は、α＝. 900であった。以上の結果から、本研究によって作成された境界性パーソナリティ特性尺度は、十分な信頼性を備えているといえる。

3－3．妥当性の検討

基準関連妥当性を検討するため、井沢ら（1995）によるミロン式臨床多軸目録境界性スケール短縮版との妥当性係数が検討された。その結果、妥当性係数は0.692（$p<.01$）であった。次に、一般的なストレス傾向を示す MINI27（村上、1994；1999）との妥当性係数を検討した。その結果、妥当性係数は0. 701であった。したがって、本尺度は十分な基準関連妥当性が満たされたといえる。さらに、類似概念との弁別的妥当性を検討するため、自己愛性人格目録（小塩、1998）との Pearson の積率相関係数が検討された、その結果、有意な関連性はみられなかった。したがって、本尺度における「境界性パーソナリティ特性」概念と「自己愛性人格」概念との間の弁別的妥当性が保証されたと言える。以上の結果を Table 2 .に示す。

Table1. 境界性パーソナリティ特性尺度の因子分析結果

		1	2	3	4	5
項目48	後先を考えず，怒ってしまうことがある	**.732**	.119	.112	.154	−.045
項目49	人があまり怒らないようなことでも怒ってしまうことがよくある	**.726**	−.036	.203	.088	.059
項目9	私は短気である	**.696**	−.134	.067	.000	.166
項目39	怒りを感じるとすぐに相手を傷つける発言をしてしまうが，その後ひどく後悔することがよくある	**.678**	.200	.037	.123	−.005
項目28	私は滅多に怒らない	**−.619**	.112	.026	.072	−.166
項目59	自分の感情をコントロール出来ない	**.597**	.221	.263	.255	.021
項目32	嫌な事があると，感情が爆発してしまう	**.591**	.219	.023	.109	.148
項目62	わかっていても言ってはいけないようなひどいことを友達に言ってしまうことが多い．	**.558**	.115	.195	.041	−.071
項目37	衝動的な行動をとってしまうことがある	**.547**	.172	.200	.198	−.027
項目40	私はかなりの気分屋だ．	**.530**	−.008	.207	.081	.001
項目21	私は相手から期待している反応が得られないと，その相手に対して強い怒りを感じる	**.497**	.182	.227	.027	.123
項目74	無理な要求をして友人を振り回してしまうことがよくある	**.459**	.315	.104	.016	−.014
項目72	周囲から受け入れてもらいたいと強く願っている．	.072	**.725**	.089	−.013	.028
項目70	困った時には，他人からたすけてもらいたいと強く願っている	.014	**.651**	−.034	−.017	−.078
項目73	周囲から嫌われてしまうのではないかと非常に怖れている．	.141	**.615**	.167	.187	.150
項目69	私は孤独に耐えることが非常に苦手だ．	.052	**.567**	−.019	.084	.016
項目15	心から信頼できる人に守ってもらいたいと強く思う．	−.009	**.504**	.013	−.044	.063
項目41	人気のある人を妬ましく思う気持ちが強い．	.208	**.463**	.231	.060	.039
項目68	大切に思っている人に要求ばかりして，罪悪感を覚えることが多い．	.340	**.458**	.039	.176	.074
項目47	大切な人が去っていくくらいなら，どんなことをしてもつなぎ止めたい．	.015	**.456**	−.011	.125	−.185
項目23	私を本当に好きなってくれる人がいるかどうか不安である	.168	**.416**	.258	.128	.325
項目2	私の期待通りの言葉をかけてくれたり，私が望んでいる態度を示してくれる友達が欲しい	.146	**.378**	.127	−.049	−.017
項目43	友人達の中では，本当の自分ではないと感じる	.140	.129	**.695**	.053	.173
項目46	私はどこにいても演技をしているように思う	.152	.192	**.684**	.130	.133
項目6	子どもの時から，表面的な友人はいても，真の友人は少ない	.174	.021	**.596**	.264	.100
項目14	長いつきあいをしている友人はとても少ない	.099	−.031	**.459**	.256	.099
項目31	私が大切に思う人ほど，私から離れていくように思える．	.219	.295	**.457**	.264	.142
項目27	表面的には社交的だが，実は非常に疑い深い．	.273	.191	**.399**	.004	.063
項目22	くだらないと思った人とは，なるべく早めに縁を切る	.218	−.294	**.383**	−.005	.009
項目36	私にとって，両親とは，どのような存在なのか，よくわからない	.108	.030	.097	**.656**	.070
項目4	重要な時に親は私を助けてくれた	−.098	.099	−.164	**−.644**	−.236
項目64	ひどくショックを受けると，生きている感覚がなくなるような気がする	.201	.263	.314	**.465**	.096
項目79	感情を素直に出すことは，親からよく思われてこなかった．	.123	.033	.299	**.449**	.009
項目51	自分と同じ痛みを味わった人とは，家族以上のつながりを感じる	−.041	.281	−.085	**.430**	.026
項目5	どうやって死のうかと考えたことがある	.155	.004	.214	**.395**	.190
項目42	私は前向きで，幸せな人間だと思う	.089	.132	.181	.197	**.807**
項目19	私はほとんどいつも幸せで，前向きな人である	.075	.091	.100	.165	**.801**
項目1	私は非常に社交的である	−.043	.145	−.159	−.086	**−.519**
	因子寄与	5.05	3.68	2.87	2.19	2.04
	累積寄与率	13.29	22.98	30.52	36.29	41.67
	α係数	.888	.805	.781	.724	.785

※項目1，項目4，項目28は逆転項目．

Table2. 境界性パーソナリティ尺度の妥当性

	自己愛	ミロン式境界性スケール	MINI27
BPD尺度	.046$^{n.s.}$	.692**	.701**

$p < .01$**

4．考察

4－1．境界性パーソナリティ特性尺度の信頼性と妥当性

本研究で作成された境界性パーソナリティ特性尺度の特徴は、水準を満たす高い信頼性を示した点にある。従来のBPT尺度のα係数が．70から．50の範囲であったこと（井沢ら、1995）からも示されるように、BPT研究における課題の一つは信頼性の低さと言える。したがって、本研究で示された全体としての信頼性の高さ（α＝．90）は、従来のBPT尺度の課題の一つを克服した点で特に注目される。今後、調査協力者数を増し、性差の偏りを是正した追試を行い、一層高い信頼性を示す尺度作成を試みたい。

妥当性において、基準関連妥当性、弁別妥当性の双方で十分な水準を満たす値が獲得された。境界性パーソナリティ特性の高い者は一般的にストレスも高く、また、その内容は自己愛性パーソナリティとは異なっている。この観点からは、今後、自己愛性パーソナリティ特性尺度を作成することも課題と考えられる。

4－2．境界性パーソナリティ特性とBPD理論の整合性

境界性パーソナリティ特性尺度は、十分な信頼性と妥当性を有しつつ、「情動制御不全」、「保護欲求不全」、「対人関係制御不全」、「保護者との関係不全」、（逆転因子としての）「自己安定性」から構成されていた。しかし、BPTという概念には連続説と非連続説の論争があり、構成概念としての成立に議論の余地が残されていた。そのため、本尺度で抽出された因子と従来のBPD理論との整合性を確認する必要がある。

第一因子である「情動制御不全」について、全てのBPD理論は共通して情動の不安定性（affective instability）を主張しており（Dean、2001）、とりわけ現在、BPD治療において高い有効性を示す弁証法的行動療法（Linehan、1981；1987）による生物社会学的理論では、情動制御不全をBPD理解の核心の一つと見なしている。認知行動療法とは対立する精神分析的理論においてもBPDは衝動的な攻撃性（怒り感情）の高さを特徴とすることが指摘されている（Kernberg、1975）。以上の理由から、本因子は既存のBPD理論と整合性を有していると考えられる。

「保護欲求不全」因子は、長期にわたり十全な保護感覚が得られなかった内容を示している。BPDの発生に関する精神分析理論においては、早期養育環境の保護不全が見捨てられ抑うつを形成する仮説を展開しており、また弁証法的行動療法では「無効化する環境論」において、安定した保護感覚を得られない体験の集積がBPD発生要因の一つと考えられている。

また本因子の項目を検討すると、「大切に思っている人に要求ばかりして、罪悪感を覚えることが多い」（項目68）、「大切な人が去っていくくらいなら、どんなことをしてもつなぎ止めたい」（項目47）など単に青年期特有の保護欲求を抱いているだけではなく、BPDのケースで指摘される過剰な愛情確認欲求や巻き込み行動も含まれている。以上の理由から、本因子は既存のBPD理論と整合性を有していると考えられる。

第三因子である「対人関係制御不全」は、表面的には友人関係も営まれているものの、自身の内面を表出することには過剰なまでに慎重であり、長期的な人間関係を構築することが出来ない内容となっている。この因子は、特に弁証法的行動療法と高い整合性を持つと考えられる。Linehan（1993）は他者を過剰に疑ったり、愛情を確認しすぎることにより、最終的に重要な他者との関係性を崩壊させてしまう対人関係パターンがBPDの特徴の一つであることを指摘している。

第四因子である「保護者との関係不全」は、多くのBPD理論が何らかの理由で家族関係に強い葛藤を抱えている指摘と一致する（e.g.,Human et al、1989:Paris et al,1994:Perry et al、1993）。両親の養育態度の影響は、力動的理論（Gunderson & Singer、1975）や認知行動的理論（Linehan、1993a:1993ｂ）を問わず、ほぼ全てのBPD理論で指摘されており、実証的研究においても、低い「世話」得点と高い「過保護」得点という養育パター

ンが境界性人格特性のリスクファクターとして報告されている（Paris & Frank、1989：Torgersen & Alnase、1992)。

一般に、思春期・青年期は保護者との関係が再構築される時期であり、その関係性が葛藤を帯びることは自明である。しかし、本因子の項目を検討すると、単なる葛藤ではなく、非常に強いネガティブな情動喚起との関連性が示されている。「ひどくショックを受けると、生きている感覚がなくなるような気がする」（項目64）や「どうやって死のうかと考えたことがある」（項目５）は、通常の保護者との葛藤では見られない強度を有している。したがって、本因子はBPD理論で指摘されている家族関係における強い葛藤を反映したものと考えられる。

第五因子である「自己安定性」は、健全な自己像を反映した内容となっている。ＤＳＭ-Ⅳ-ＴＲに示されるように、境界性パーソナリティ障害では同一性障害や慢性的空虚感が見られることから、この結果は他の境界性パーソナリティ特性尺度の逆転因子として理解することが出来る。

以上のように検討すると、本尺度で仮定した境界性パーソナリティ特性と既存のBPD理論が指摘する見解には整合性が確認できる。したがって、青年期の母集団を対象とした場合、BPTという概念は成立すると結論できるだろう。

４－３．境界性パーソナリティ特性研究の意義と課題

４－３－１．境界性パーソナリティ尺度の解釈における注意点

連続説と非連続説の論争に見られるように、これまで境界性パーソナリティ特性は、その概念を巡って理論的な対立が生じていた。本研究で５因子からなる境界性パーソナリティ特性尺度が成立したように、非臨床群と臨床群の間には、少なくともある程度の連続性は認められるのではないだろうか。

しかし、このことはBPDの軽症化による診断の乱用防止を否定するものではない。本研究で導かれたBPTは決して診断概念ではなく、BPDの特徴的な問題行動が非臨床群にも存在することを示す記述的概念として位置づけられる。軽症化による診断の安易な乱用は厳に慎まねばならない。

他方、既存の理論に合致しないからと言って、BPDとの連続性が仮定できる問題行動を習慣化しているクライアントの存在を否定することも決してなされるべきではない。理論に合致した重篤な症状を示すクライアントのみをBPDと呼び、それ以外を「BPDではない」と述べるにとどまり、介入に効果的な概念化を拒むこともクライアントの利益に反していよう。多くのBPD理論は何らかの遺伝的要因と環境的要因の相互作用によってBPDが形成されることを指摘しているが、とりわけ現代の日本の青年層は環境要因の影響を受け、一時的にせよBPD的な心理状態に陥る可能性は否定できないのではないだろうか。すなわち、本研究の結果をふまえれば、BPTとは「パーソナリティ障害と定義できるほどの重篤な強度は示さないものの、主として環境要因によって学習された、BPDの操作的定義と類似し、かつ、連続性をもった認知・行動パターン」と再定義できるだろう。

斎藤（2007）は、その環境要因としてLinehan（1993a；1993b）が提唱した「無効化する環境」（Invadidating enviroments）が進行しており、この影響を受けて、特には思春期・青年期層のBPT化が浸透しつつあるとの仮説を提唱している。今後、「青年期版 無効化環境体験尺度」（社浦・斎藤、2007）との関連性を検討し、この仮説を検証する必要があるだろう。

また、こうした尺度研究においてしばしば誤解されるように、得られた各因子がBPDの原因として提唱されているわけではない点にも注意を促したい。例えば、本尺度では下位因子として「保護者との関係不全」因子が得られているが、それは青年期の非臨床群の中に保護者との強い葛藤を課題としている者が一定の割合で存在する状況の指摘であり、保護者による不適切な養育環境がBPDを発生させるという因果関係を述べているのではない。Gunderson ら（2005）が述べているように、不適切な家族関係など、単一の事象にBPD発生の原因を求めることは、クライアントが新たに環境との関係を築き上げることへの妨げとなるだろう。

また、本尺度で使用したBPT概念は比較的健康な母集団から得られた因子であることから、従来のBPD理論で指摘されていた重要な概念が、そのままの形で反映されているわけではない。例えば本尺度における「保護欲求不全」や「対人関係制御不全」と従来のBPD理論において必須の要因であった「見捨てられ不安」の関連性は明確ではない。同様の疑問は二分法的思考についても指摘できる。加来ら（2005）が指摘するように、「見捨てられ

不安尺度」および「二分法的思考尺度」を作成することにより、両要因の関連性を検討する必要があるだろう。

こうした注意点と課題を踏まえた上で、本尺度は、これまで量的研究が乏しかった境界性パーソナリティ特性研究に基礎的データを提供するツールとして役立てられると思われる。今後調査協力者数を増し、さらに信頼性と妥当性の高い尺度作成が求められる。

4－3－2．境界性パーソナリティ特性への効果的な介入への仮説　―弁証法的行動療法を重視して－

本研究の境界性パーソナリティ特性の因子構成を検討すると、弁証法的行動療法（Linehan、1993a;1993b）による主要4スキルとの適合性の高さが指摘できる。Linehan（1993a;1993b）は、BPDの発生要因として遺伝的要因と「無効化される環境」の相互作用を仮定した生物社会学的理論を提唱した。生物社会学的理論におけるBPDの課題は、臨床を継続する動機を健全に持続させることと、「無効化する環境」により獲得が困難であった心理・社会的なスキルの学習である。

弁証法的行動療法における心理・社会的スキルは、効果的に自身の体験を深める「マインドフルネス・スキル」、長期的な人間関係を構築する「効果的な対人関係スキル」、衝動的な情動をコントロールするための「情動コントロール・スキル」、そして危機的状況を導くストレッサーに対して耐性を高める「ストレス耐性スキル」から構成されている。

本尺度との関連性では、情動制御不全因子に対して情動コントロール・スキル、保護希求因子に対してマインドフルネス・スキル、対人関係不全因子に対して効果的な対人関係スキル、保護者との関係不全因子に対して、ストレス耐性スキルが、それぞれ対応している可能性がある。こうした仮説に基づき弁証法的行動療法の各スキルを尺度化し、本尺度との関連性を検討することは、BPTへの介入において有効な対処論の構築につながるだろう。すでに弁証法的行動療法の各スキルは尺度化されている（斎藤・守谷・山内・池田・社浦、2008）ことから、早急に本尺度との関連性を検討する必要がある。こうした試みはBPTの認知・行動変容のみならず、「青年期の無効化する環境」への予防策としての意義を併せ持つと思われる。

引用文献

Cloninger, C.R 1987 A systematic method for clinical description and classification of personality variants. Archives of General Psychiatry,44,553-588.

Dean, M.A 2001 Borderline Personality － The Latest Assessment and Treatment Strategies － (2ed) Compact Clinicals.

Gunderson,J.G & Hoffman P.D 2005 Understanding and Treating Borderline Personality Disorder American Psychiatric Publish Inc.

Gunderson, J.G. & Singer, M.T 1975 Defining borderline patients: an overview. American Journal of Psychiatry, 132, 1-10.

Human J,Perry J,van der Kolk B 1989 Childhood trauma in borderline personality disorder. American Journal of Psychiatry,146,490-495.

井沢功一郎　2002　境界性人格特性　下山晴彦・丹野義彦編　講座臨床心理学4　異常心理学Ⅱ　東京大学出版会 49-82.

井沢功一朗・大野裕・小此木啓吾　1995 ミロン式臨床多軸目録-ⅠⅠ境界性スケール短縮版の構成とその妥当性・信頼性の検討-　季刊精神科診断学、6,473-483.

加来華誉子・斎藤富由起・守谷賢二・末武康弘　2005　境界性人格障害への定量的アプローチの展望と課題。法政大学大学院 人間社会研究科 臨床心理相談室報告紀要、2、17-30。

加倉井華誉子　2005a 弁証法的行動療法におけるコミュニケーション・スキル尺度作成の試み　法政大学人間社会研究科紀要、54.

加倉井華誉子　2005b　弁証法的行動療法における境界性人格へのグループアプローチ－コミュニケーション・ス

キルの観点から－　法政大学人間社会研究科2004年度修士論文.

Kaplan, H.I., 1994 Kaplan & Sadock's Synopsis of Psychiatry: Behavioral Sciences / Clinical Psychiatry. 9th ed. Philadelphia.

Linehan, M.M., 1981 A social-behavioral analysis of suicide and parasuicide: Implications for clinical assessment and treatment. In H.Glaezer & J.F.Clarkin(Edu.), Depression:Behavioral and directive intervention strategies, 29-294. New York. Guilford Press.

Linehan, M.M., 1987 Dialectical Behavior Therapy for Borderline Personality Disorder: Theory and method. Bull Menninger Clin., 51,261-276.

Linehan, M.M., 1993a Cognitive behavior treatment of borderline personality disorder. Guilford Press, New York.

Linehan, M.M., 1993b Skills Training Manual for Treating Borderline Personality Disorder. Guilford Press, New York.

Morey, L.C 1991 Personality assessment inventory. Psychological Assessment Resources,Inc.

Morey, L.C 1997 PERSONALITY ASSESSMENT SCREENER-Score Report-. Psychological Assessment Resources,Inc.

村上宣寛　1994　なぜ Mini、MMPI－１が必要なのか　精神科診断学、5、103-114.

村上宣寛　1999　Mini27　性格は５次元だった－性格心理学入門－　村上宣寛・村上千恵子　培風館　210-220.

小塩真司　1998　青年期の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連　教育心理学研究、46、280-290.

Paris,J. & Frank,H., 1989 Perception of parental bonding in borderline patients. American Journal of Psychiatry,146,1498-1499.

Paris, J,Zweig-Frank H,Guzder J 1994 Risk factors for borderline personality in male outpatients. Journal of Nerv Ment Dis,182,375-380.

Perry, J 1993 Longitudinal studies of personality disorders. Journal of Personality Disorder,7,63-85.

Raskin, R. & Hall, C.S 1979 A narcissistic personality inventory. Psychological Reports, 45, 590.

斎藤富由起　2007中学生における居場所感と自己肯定感の関連性　子どもの権利研究、11、87－94.

斎藤富由起・守谷賢二・山内早苗・池田彩子・社浦竜太　2008 弁証法的行動療法における主要４スキル 尺度化の試み　投稿中.

社浦竜太・斎藤富由起　2006 青年期におけるストレス尺度およびノンサポート尺度の開発　－PAI 標準化の予備的検討－　日本心理臨床学会第26回大会発表論文集.

社浦竜太・斎藤富由起　2007　「青年期版 無効化環境体験尺度」開発の予備的検討　日本コミュニティ心理学会第10回大会発表論文集 86-87.

Tregerson,S. & Alnaes,R 1992 Differential perception of parental bonding in schizotypal and borderline personality disorder. Comprehensive Psychiatry,33,34-38.